

「子どものおたすけ  
発達障害・不登校・  
虐待 イライラしない  
子育て法」(養徳社)



という新刊が届いた。著者は杉江健二さん(64)と新田恒夫さん(67)。新田さんは、実はわたしの中学高校の同級生。多感な思春期を共に千葉市で過ごした。卒業してから、会うことも少なかったが、16年前、わたしが奈良に移住したのをきっかけに交流が再開。というのも、彼は天理教の信者で、「月次祭」に参拝するため、毎月1度、必ず天理市に来ていたからだ。会って語りあううちに、互いに中学時代には思いもよらない道を歩んでいることがわかった。わたしは作家になって奈良に移住。奈良少年刑務所の更生教育に関わり、受刑者たちに詩を書いてもらう授業をしていた。一方、新田さんは、天理教の教会長になり、子どもたちの居場所「スペース海」を作って盛んに活動をしていた。不登校の子や障害児のための施設だ。きっかけは、彼が29歳のときに生まれた最初の子・真理子さんが、障害を持っていたことだったという。

「1歳になっても歩かないし、うすうす感じてはいたの

# 新刊「子どものおたすけ」

ですが、障害をはっきり他人から告げられたのは、真理子の1歳半健診のときでした。真理子がパニックになってろくに健診ができなかったんです。すると翌日、看護師さんがわざわざ家まで尋ねてきてくれて「お嬢さんには発達の遅れがあるようだから、一刻も早く専門医に診せた方がいいです」と進言してくれました。しかし、わたしはそのとき、怒りしか感じませんでした。そんなわけがない、発達

がゆっくりなだけで、真理子はきっと普通になる、わたしがそうしてみせるって、看護師さんを玄関から押し出すようにして帰してしまいました」

結局、真理子さんが歩いたのは5歳になってからだった。障害があるとわかって、もそれを受容できるようになるまでには、長い時間がかかった。

「真理子が15歳のときのことです。ある朝起きると、真理子の顔がまん丸に膨らみ、手も足もパンパンに浮腫んでいたんです。拡張性心筋症でした。絶望しました。夜もろくに寝てくれない真理子に付きあって、夫婦で力を合わせて必死で育てているのに、神様はなぜこんな試練を与えるのかと。もう信仰を捨てるつもりで先輩に会いに行ったところ、「真理子ちゃんに親孝行をさせてあげなさい」と言われたんです。わたしは内心「何を言っているんだ、言葉も出ない、パンツの上げ下ろしもできない真理子に、どうやって親孝行をしろというんだ」と思いました。すると先輩は「親を喜ばせるのが親孝行だろう。真理子ちゃんのことを、あなた夫婦が心から喜ぶことができたら、それは真理子ちゃんが親孝行をしたということになるんだよ。親孝行な子に未来が拓けないはずがないじゃないか」と。それを聞いて、涙が止まりませんでした」



「子どものおたすけ」を手にする著者の新田恒夫さん(右)と杉江健二さん

生まれから15年。障害のあるわが子を受け入れられるまでの苦しみは、想像に余りある。しかし、その苦しみが、

新田さんを「他者の苦しみに寄り添える人」にしたのではないだろうか。わたしも、彼の深いやさしさに、たびたび心打たれている。

もう一人の著者・杉江さんも天理教の教会長。親の代からの里親を引き継ぎ、夫婦で44名もの里子を育ててきた。杉江さんの長女は多機能障害で生まれ、生後間もなく息を引き取ったという。そのとき「生きていても不登校や引きこもり、虐待で苦しんでいる人がいる。そんな人の役に立つ人生を歩もう」と心に誓ったそう。

新田さんも杉江さんも障害児の親という当事者であり、同時に困難を抱えた多くの子どもや親と向きあってきた。だからこそ書けた本だと、一読して思った。それは、わたしが少年刑務所の10年間で得たものと、実に相似形だった。受け入れ、寄り添い、共に育っていく生き方。天理教の人々に向けて書かれた本だが、この本は誰が読んでも為になり役に立つだろう。とても具体的でわかりやすいハウツー本であると同時に、深く心と魂に浸みてくる本だ。ぜひ手に取ってほしい。

(作家、詩人)

## ならまち暮らし

寮 美千子